

他者から必要とされる喜びが、 介護する人、される人の両方に

ひと あしあと

「このまま私はどうなるのだろう」。当たり前になってきたことができなくなる…。認知症や高齢による身体機能の低下に直面した時、人は自分の生きる価値を立ち止まって問わざるを得ない。その現実の厳しさにいらだったり、ふさぎこんだりすることもあるだろう。介護福祉士で牧師の佐々木炎さんは、「人は人であるという理由だけで尊厳存在」と話す。運営するNPO法人では、単に「介護する人」、「介護される人」をこえた関係性がある。その現場の背景にあるものは何だろうか。

《今月の「ひと」》——介護福祉士・牧師 佐々木炎さん



利用者と職員という境界線がない

神奈川県川崎市でNPO法人「ホッとスペース中原」を併設する教会堂は平日、デイサービスに集う人々にぎわう。4階建ての建物は、様々な背景の人が住むシェアハウスでもある。近隣のいくつかのアパートにも二十数人が部屋を借りて共に生きている。「ここでは高齢者だけ、障がい者だけ、とせず、包括的にケアする。支援制度からもれる元受刑者、元引きこもり、ひとり親、児童養護施設卒業生、在日外国人といった方々も受け入れている」と佐々木さん。

利用者と職員という境界線がないことも特徴だ。利用者だった人が職員となることもある。「経験した人にしか分からない痛みを教えられる。病の当事者の職員もいて、朝出て来られない、連絡がない、ということもある。そういう人とも共に働き、『休んでいい』と互いに認め合う。そういう職場だからみな働き続けられる。傷ついた人が、まず神様の愛で受け入れられる経験をする。すると自分自身を見ることができ、自分を愛することができると話した。

「初めて、自分が他者から必要とされる喜びを体験した」

「神様の愛」とは何だろうか。それは聖書の中で、一匹の羊を命がけで助けることを語ったイエスの姿だ（新約聖書・ルカの

福音書15章4〜6節）。佐々木さんは、この箇所を読んだ時、「社会の群れから弾き出され、心が荒れずさみ、寒さに震えていた私を、主イエスはいのちをかけて探し出し、無条件に丸ごと抱きかかえて温めてくれた」と感じた。そこには、自身の厳しい少年時代があった。

人里離れた場所に、掘っ立て小屋をたてて暮らしていた。テレビも冷蔵庫も風呂もなかった。精神疾患で父は働けず、母のパートの収入だけという「貧困の極み」だった。

父親からは、言うことをきかなければ暴力を振るわれた。佐々木さんは反発から家族や社会を恨み、「力こそ生きる術」と信じようになった。高校時代には、ある暴力的な組織を束ねた。やがて事件で学校から謹慎処分を受けてしまった。暴力の限界、という現実を突きつけられた。

そんな中、教会に行き着く。「初めて、自分が他者から必要とされる喜びを体験し、聖書から、ありのままの自分が受け入れられることを知った。そこから牧師、介護福祉士の人生が開けた。

「能力第一」で見失われるもの

介護の現場では「弱さ」から気づかされる経験をする。「能力を第一とする価値基準に縛られ、上昇志向と成果主義に追われる私たちは、人として無くしてはならない愛を見失ってしまったのではないだろうか」。「介護は楽しい」とも言う。「無

介護で分かち合うことで、人も社会も変えることができます。そこに介護の楽しさがあります

力を味わいながらもなおそこに留まり、心触れる介護を提供する。そこに、お互いに変えられていく経験が生まれる。介護で分かち合うことで、人も社会も変えることができる。そこに介護の楽しさがあります。このような思いで、地域社会、職員と協力しながら、今日も一人ひとりの弱さに向き合っている。

私たちの教会はエホバの証人、末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）、統一教会（世界平和統一家庭連合）ではありません

抽選で3名様に佐々木さん著『人は命だけでは生きられない』を贈呈

福音版編集部プレゼント係まで左記の事項を記載の上ハガキで送付ください。①住所、氏名、年齢②今月号の感想③本紙への希望④今月号のコトバは「アラム」。応募締切2023年7月31日(当日消印有効)。送付先 〒164-0001東京都中野区中野2-1-5 クリスチャン新聞。当選の発表は発送をもってかえさせていただきます。

今月号のコトバは「アラム」

二次元コード